

岩手県文化財調査報告書第六十三集

盛 街 道

岩手県「歴史の道」調査報告

岩手県教育委員会

岩手県「歴史の道」調査報告

盛
街
道

序

地域開発に伴なう交通網の整備は、現代社会の進歩発展から生ずる必然的な要請であり、県内においても日々近代的な道路の建設が各所で行われ、私達の生活は一段と便利になり多大の恩恵を受けております。

しかしその反面、本県歴史を知る上にきわめて重要な意味をもつ道・河川などの交通路に残る並木道・道標・里塚などの交通遺跡が次第にその姿を消してしております。このような現状を重視し、本県では昭和五十二年度から国庫補助を受け「歴史の道」を調査してまいりました。

本報告書は、本年度に調査しました五街道のうち、奥州道中水沢宿の不斷橋を起点として北上川を渡り、岩谷堂・人首・世田米を通って盛（大船渡）にいたる「盛街道」について、街道の現状と文化財の保存状況など、その周囲の環境を含めて総合的に調査し、その成果を集成したものであります。

本書が、今後の交通関係遺跡の保護及び歴史の道研究の一助となれば幸いであります。

なお、調査に御協力いただきました調査員各位並びに関係市町村教育委員会をはじめ、諸資料を提供してくださった方々に対し、衷心より感謝申し上げます。

昭和五十六年三月

岩手県教育委員会

教育長

新里

盈

岩手県

青森県

秋田県

宮城県

1:370,000



盛街道 (人文社37万分の1より)

例 言

一、本書は歴史の道「盛街道」に関する報告書である。

二、本調査は上として次にあげるもの収集し、調査を実施した。

(1) 収集したもの

古文書、地誌類、紀行文、古絵図類や明治時代の実測図など。

(2) 調査した事項

(7) 道及びこれに沿う地域に残る遺跡の分布状況と保存の実態。

(8) 江戸時代の国界・藩界及び都名。

三、本調査の調査員・補助員は左記のとおりである。

主任専門調査員 草間俊一 岩手大学教授

専門調査員 細井計 岩手大学教授

専門調査員 古田義昭 盛岡市教委文化財専門員

地区調査員(江刺市) 佐嶋与四右衛門 元建設省岩手工事事務所職員

地区調査員(住田町) 紺野孝 住田町文化財調査員

地区調査員(大船渡市) 金野菊二郎 大船渡市文化財調査委員長

補助員 高橋哲郎 岩手大学文部技官

四、調査の方法は、地区調査員が調査カードを作成し、調査カードにもとづき専門調査員が確認調査を行なった。

五、本書は、専門調査員細井 計が執筆し、文化課が編集にあたった。

目 次

岩手県教育委員会教育長 新里 盛

序				
例 言				
一、盛街道について			
二、街道の現状と文化財の保存状況			
三、街道筋に残る主な文化財			
写 真			
地 図			
35	27	23	8	7

一 盛街道について

水沢宿の不斷橋を起点として奥州道中を北上し、ト文字で分岐して北上川を渡り、さらに、仙台藩の重臣が配属されていた岩谷堂・人首の両宿（江刺市）を経由し、やがて種山高原を越えて氣仙郡に入り、世田米宿（住田町）から白石峠を越えて盛宿へと通じる道筋が、盛街道と呼ばれていたものである。その途中では、氣仙街道・遠野道・江刺街道などの呼称も使われていたが、本報告では盛街道に統一することにする。

ところで、江戸時代の奥州道中は、緻密な意味では、宇都宮宿の次の白沢から奥州白河までの二〇宿であり、白河以北はその延長とみなされていた。

したがってそのような観点からすれば、万延元年（一八六〇）に仙台藩が領内を通る奥州道中の人馬賃錢について、「是迄四割増之上三割増、都合七割増」の増額額を出したのに対し、幕府勘定奉行名で「脇往還、右体多分の割増相添候先例無之、殊、割増年季中窮困与之中立を以、此上再割増被仰付候而者、外審ニも相成可申哉付、願之趣旨不被及御沙汰旨被仰渡可然奉存候」と、却下された文中に明示されているように、幕府は白河以北の奥州道中の延長線を脇往還（脇街道）とみなしていた。しかし、それが東北地方を縦断する幹線道路としての役割を果していたことは事実である。この幹線道路としての広義の奥州道中からは、多くの脇街道が分岐している。本報告で取扱う盛街道もその一つである。

江戸時代の陸上交通を支配關係から一瞥すると、五街道（東海道・中山道・甲州道中・日光道中・奥州道中）とその附屬街道が幕府道中奉行の管轄であったのに對し、その他の街道は、白河以北のいわゆる奥州道中をも含めて、幕府勘定奉行の支配するところであり、それは上として賃錢などの統制面にかかわる点であった。そのため、街道の善詔・橋梁の修理・並木の保護などの実際面にかかる点は、沿道の大名や旗本といったそれぞれの領主の管理に

ゆだねられていた。したがって、盛街道は仙台藩の管理するところであり、その実際面は沿道の村々の責任で行なわれていたわけである。

次に、この盛街道の道筋や呼称などについて簡単に触れておこう。まず盛街道の道筋がいつごろ開発され、その後どのような変遷を経て改良整備されたものか、史料的にその間の経緯を明らかにすることは、現在のところ不可能であるが、道筋それじたは、「次丸村元禄絵図」、「世田米村元禄絵図」なるものをはじめ、「岩手県管轄地誌」などをみると、によって確認できる。

街道の呼称については、明治三年（一八九〇）の岩手県道路改修案や同七年の岩手県予算書などに「盛街道」と記されているので、明治期には「盛街道」と呼ばれていたことがわかる。さらに、安永年（一七七三）に提出された江刺郡各村の「風土記綱用書出」によれば、次丸村（江刺市）では道筋、但、次丸村之内が岩谷堂人首町野手崎町之道と記している。また、角掛村（江刺市）では「老筋、但、角掛村之内岩谷堂人首町之道」、片岡村（江刺市）では「老筋、但、岩谷堂町人首町野手崎町之道、老筋、但、岩谷道町上伊沢水沢町之道」と述べている。これらの記述からすれば、藩政時代の街道については、それぞれの目的地の名をつけて、「どこにへの道」というのが一般的な呼称であったといえよう。このことは盛街道沿いにある道標からも指摘できる。たとえば、元禄五年（一六九二）建立の伊勢堂の道標には「右 美さし道、左 金かさき道」とあり、また、安永元年（一七七二）建立の中島の道標は「右ひとかへ道、左のてさき道」、宝暦二〇年（一七六〇）建立の馬場の道標は「向 右いはやとう道、左いて 東山道」と刻んでいる。さらに、文化六年（一八〇九）建立の旧大橋の道標は「右ハ東山さる沢、中ハいて町けせん、左ハ人かへとを」と、東山・猿沢、伊手・氣仙、人首・遠野の各地へ通じる道を案内している。したがって、盛宿を目的地として広くとらえる場合には、「盛町之道」という意味で、盛

街道と呼ばれていたものと思われる。

最後に里程について簡単に触れておこう。仙台藩では「大道」と「小道」の区別があり、概して主要道路については「大道」であらわし、その他の村道的なものは「小道」で表示している場合が多いようであるが、必ずしも統一されたいたわけではない。たとえば、盛街道とは直接関係ないが、今泉街道（山日宿（今泉宿）の長坂宿（東山町）から掛沢宿（大東町）までの道法は、「大道」で「一里拾五」、「小道」で「八里・」）とあり、同一ルートが「大道」と「小道」で表示されているのはその典型的な例である。ここでは「大道」が「一里」、「六町」、「小道」が「一里」、「六町」の割合となっている。なお、「大道」が「三・六町」をもつて「一里」としていたことは間違いないが、「小道」の方は統一されていなかったようである。たとえば、古川吉松軒が「仙台城下より北方は、今に夷の風俗ありて万事異なること多く、行程も五町一里、六町一里、七町一里などと所どろにて替わりたるに、仙台城下より南は、行程も二・六町を以て「一里」と、……」（『東遊雜記』）と指摘しているのはそのあらわれであろう（『岩手県文化財調査報告書』第四十一集）。

二 街道の現状と文化財の保存状況

盛街道は水沢市不斬町から大船渡市盛町までである。ここでは、その間の街道の現状と文化財の保存状況について、次の区分にしたがって説明を加えることにする。

- (1) 不斬橋（水沢市）→岩谷堂（江刺市）
- (2) 岩谷堂（江刺市）→蛤坂（江刺市）
- (3) 蛤坂（江刺市）→人首（江刺市）
- (4) 人首（江刺市）→種山七里塚（江刺市）
- (5) 種山七里塚（江刺市）→小府金一里塚（住田町）
- (6) 小府金一里塚（住田町）→白石峰（住田町）

(7) 白石峰（大船渡市）→盛（大船渡市）

以上のうち、(3)・(4)の道筋と(5)の前半部分は、県道（水沢・住田線）とまつたく異ったルートを進んでいる。

(1) 不斬橋→岩谷堂

盛街道（以下、旧道という）は、水沢市の乙女川に架かる不斬橋のところを起点としている。以前には、県道盛街道の元標が橋の手前東側にあつたといふが、今は見あたらない。この不斬橋のところを起点とする旧道は、奥州道中と重なって国道四号線上を北上していくが、その間、東北本線の敷地を廻避して約一〇〇mほど進んだ西側に、文政六年（一八二三）の山神碑（高さ八五cm、幅九〇cm）、喉病によく効くといわれた年号不明の石地蔵（総高一四五cm）が鎮座している。そこから約九〇〇mほど北上したところで、旧道は園田四号線と分歧して右側に入る。これが奥州道中のルートである。そして旧道は十文字の三叉路で直角に右折し、そのまま伊勢草原まで東進している。したがって、盛街道は起点から十文字までは奥州道中と並んでいたわけである。

上文字には、年号不明の道標（高さ二〇cm、幅二〇cm）と石地蔵（高さ六〇cm、幅七〇cm）のほかに、天明二年（一七八二）の南無觀世音碑（高さ九〇cm、幅一〇〇cm）、文化五年（一八〇八年）の象頭山碑（高さ六〇cm、幅六〇cm）、嘉永二年（一八四九年）の南無阿彌陀仏碑（高さ五〇cm、幅四〇cm）、安政四年（一八五七年）の天照太神碑（高さ一〇〇cm、幅一〇〇cm）などがある。道標はなかば埋没しているが、「是より 右岩や堂、左金ヶ崎」と刻まれていることがわかる。なお、これらの石碑群の保存状況はかんばしくないので、管理には十分な期付が必要があろう。

上文字の石碑群から東方へ約一〇〇m進んだところに伊勢堂があり、その前の坂を白井坂という。伊勢堂境内には、「右 系さし道、左 金ヶ崎道」

と刻まれた元禄五年（一六九二）の道標（高さ六・五cm、幅四・〇cm）のほかに、文政三年（一八二〇）の天照太神碑（高さ八・〇cm、幅五・〇cm）、同八年の雷神塔（高さ八・〇cm、幅六・〇cm）、天保三年（一八三二）の天照皇太神宮・金比羅大權現・西國三十三番碑（高さ一六・〇cm、幅七・〇cm）、同七年の金華山碑（高さ九・五cm、幅八・五cm）などがある。伊勢堂から約四〇〇m南に曹洞宗安養寺があり、そこから約三〇〇m東の田園の中に、幅約二mの旧道が現在農道として使用されている。その旧道の西側で、桐山と通称されているところに清水が湧出しており、往昔の旅人が喉をうるおした場所といわれている。

さて、十文字から白井坂・館下を経て中谷木に至る旧道は、桜木橋の辺で北上川を舟で渡つたが、この付近のルートは定かではない。北上川東側の渡船場（下川原渡し）は桜木橋の南約一〇〇mの地点にあつたようであるが、今はその痕跡すらとどめていない。この渡船場跡から堤防に沿つて約一五〇m北西に進んだ旧道の西側には、正徳五年（一七一五）の梵字供養塔（高さ九・〇cm、幅四五cm）、明和四年（一七六七）の南無阿弥陀仏碑（高さ一〇〇cm、幅三・八cm）、文政二年（一八一八）の山神塔（高さ一三・五cm、幅五・〇cm）、嘉永元年（一八四八）の馬頭觀世音碑（高さ二三・〇cm、幅六・〇cm）、元治二年（一八六五）の金華山碑（高さ一〇〇cm、幅三・五cm）など、九基の石碑が林立している。これらの石碑群は旧渡船場から移建されたものである。なお、桜木橋から約一km右手の前中野には、寛政一〇年（一七九八）の庚申供養塔が道端に倒れているが、その左斜面には「右ハカネカサキシムカハラ、左ハ志うしみち」と刻まれており、道標を兼ねていたことがわかる。

旧渡船場から移建された石碑群をあとにして、堤防とほど重なっている旧道を進むと、その右側に春日神社があるが、その本殿は化政期（一八〇四—一九）のものと考えられる。同社境内には寛政九年（一七九七）の湯殿山・月山・羽黒山供養塔（高さ一三・五cm、幅四・〇cm）、同年の湯殿山大權現・月山・羽黒山碑（高さ一六・〇cm、幅五・〇cm）、同年の山神塔（高さ四・八cm、幅三・〇cm）、

文化三年（一八一六）の金毘羅大權現碑（高さ一九・六cm、幅六・〇cm）、文政二年（一八一九）の庚申塔（高さ二三・〇cm、幅二・〇cm）、嘉永三年（一八五〇）の庚申塔（高さ八・〇cm、幅四・〇cm）、同七年の馬頭觀世音碑（高さ四五・四cm、幅三・〇cm）、安政二年（一八五五）の庚申塔（高さ五・〇cm、幅四五・四cm）などのはかに、明治・昭和などの石碑七基がある。いずれも石巻付近の井内石が使用されており、北上川舟運を利用して運搬されたことがわかる。

春日神社の手前七・八〇mのところが、仙台藩の下川原番所跡といわれてゐるが、今は堤防跡と変りはてていて。さらに同社から約一〇〇m進むと、旧道は東北に向つて直角に曲つて県道と合流し、そのまま県道上を上戸の地蔵堂まで進む。その間、直角にカーブする地点の上手が下川原御本殿御藏場跡であり、その西側の隣接地が下川原岸跡である。現在はその痕跡すらとどめていないが、わずかに御藏場跡を伝える石碑一基が建つていて、この御藏場跡から約三〇〇m進んだ左側に愛宕神社があるが、その本殿は正徳四年（一七一四）の造営と伝えられている。同社の境内には、享保九年（一七二四）の南無阿弥陀仏碑（高さ九・〇cm、幅五・〇cm）、同一年の同碑（高さ五・〇cm、幅四五cm）、明和七年（一七七〇）の同碑（高さ六・五cm、幅四五cm）、同一年の庚申塔（高さ二三・〇cm、幅四五cm）、寛政二年（一七〇〇年）の南無阿弥陀仏碑（高さ六・〇cm、幅五・〇cm）などがある。さらに、江戸時代の北上川舟運関係者の信仰が厚かった同社は、多くの奉納額を蔵しており、現在でも地域住民の信仰によつて整然と維持管理されている。この愛宕神社周辺の下川原町は、御藏場の町として開かれたところであり、年貢米の中継宿、櫻船所有者、船頭などの居住地区であったが、その面影はない。同社から五〇mほど進んだ道の右側に、享和二年（一七〇二年）の南無阿弥陀仏碑一基があり、さらに一〇〇mほど行くと、七里塚跡といわれているところがあるが、すでに、明治前期に県道が造られた時に取払われたと伝承され、その痕跡もなく、ただ名称のみが残つていて。

七里塚跡から約六〇〇m前方の道の右側に地蔵堂があり、中に上戸の石地

藏（高さ二〇四cm、花崗岩）が鎮座している。地蔵堂の南側は旧河道であり、河岸段丘に登る傾斜地のために上戸と呼ばれ、古来からの交通の要所であつたと考えられる。そのため、樹木におおわれて樹陰をなしている地蔵堂は、

道路向いの清水とあいまって、往昔の旅人の休息の場となっていた。しかし、その清水も道路の改良工事によつて汚出が悪くなつたため、昭和初期には廢止され、今はその跡のみがわずかに往時の名残りをとどめている。地蔵堂の狭い境内には多くの碑が置かれており、中には、道路の開削工事にともなつて他から移建されたものもある。明治二年（一七六六年）の南無阿弥陀仏碑（高さ七五cm、幅四五cm）、天明五年（一七八五年）の法華一石書写塔（高さ一二〇cm、幅八八cm）、文化八年（一八〇八年）の西國三十三所之供養碑（高さ七〇cm、幅五五cm）、同九年の金毘羅神碑（高さ八〇cm、幅七〇cm）、天保二五年（一八四四年）の太神宮碑（高さ一〇〇cm、幅九〇cm）、嘉永五年（一八五二年）の大照皇太神・熊野三社・象頭山碑（高さ一六五cm、幅一二〇cm）などのほか、

明治・大正期の石碑を含めると一二基に達している。

地蔵堂を過ぎると、旧道は県道と分かれて左手に入り、桶瀬方面に通じる倉沢道を横断し、新川付近までの約七〇〇mの区間（主として愛宕地区分）は、道幅は三・五mと拡幅改良されてはいるものの、旧道としての面影をわずかにとどめており、現在は集落や農耕用の道として利用されている。旧道が倉沢道を横断する地点に、寛政九年（一七九七年）の南無阿弥陀仏碑（高さ一〇〇cm、幅八〇cm）、同一年の庚申塔（高さ一〇〇cm、幅五〇cm）が建っている。新川の先の岩谷堂地区分の旧道は、耕地整理によつてルートも消えているが、やがて、通称猿茶屋のうしろに出て県道と合流し、約二〇〇mほど進むと、その先は県道から分岐する市道と重なつて東進し、常光院跡につき当つて左折（北上）し、一日市町に入つていている。

(2) 岩谷堂・蛤坂

藩政時代には「日市町をはじめ川原町・中町・横町・六日町・鋪錢町・新町の七町が、片岡村（江刺市）の中心地である岩谷堂町を形成していた。しかもこの地には、仙台藩の对外的防衛上の配慮から、「要害拠点」の大身の家臣であった伊達（岩城）氏が配置されていた。その上、岩谷堂は交通の要所でもあったから、安永二年（一七七三年）、七七二の片岡村の「風土記御用書出」以下、「安水風土記」というによると、(1)「岩谷堂町より氣仙」の道、(2)「同町より上口内町」の道、(3)「同町より下内町」の道、(4)「同町より人首町野手崎町」の道、(5)「同町より伊沢水沢町」の道、(6)「同町より黒石町」の道、(7)「あづま海道」の由田中伝候古道」といった七筋の道が分岐している。このうちの(6)の道が旧道にあたる。

さて、三丁六間からなる、日市町は、藩政時代には主として職人町であったが、今はその面影もない。同町の南端には、「安水風土記」に「客殿南に向ひ相建申候」と記されている眞言宗上王山常光院、往古天台宗御座候所、開基誰と申儀、年月共相知不申候、何作之頃か真言宗・總成候哉、是又相知不申候、以前今無住、而世代等相知不申候」とあり、すでに安永二年以前から無住であったことが知られる。また、常光院付近に伝馬所があつたというが、その位置を確認することはできなかつた。

常光院跡から約一五〇m北に、近世後期の建築とみられる秋葉神社がある。「安水風土記」に「秋葉山權現、但シ別當修驗秋葉院、祭日六月廿四日、長五尺横二尺、長床共南北向ひ相建申候」と記されているのがそれである。同社は一日市町の産土神であり、岩谷堂における火防祭の主神となつてゐる。現在、江刺市で行なわれている江刺甚句祭は、この火防祭の変形したものと

いう。同社境内には安永九年（一七八〇）の山神碑、寛政一〇年（一七九八）

の甲子供養塔、文政五年（一八二三）の山神碑、同八年の湯殿山・月山・羽黒山碑（高さ九〇cm）、天保四年（一八三三）の早池峯碑、嘉永元年（一八四八）の雷神碑、無年号の青面金剛像（高さ六〇cm、半肉刻）など九基の石碑

がある。秋葉神社の左前方に江刺病院があるが、その敷地は藩の雜穀蔵跡である。「安水風土記」によれば、日市町に雜穀御藏（四ツ）と御賀米御藏（二ツ）、六日町に御賀米御藏（二ツ）、川原町にも御賀米御藏（一ツ）がある

たという。さらに、一日市町を北進すると、横町に突き当つて丁字路となつたところを左折したところが代官所跡であり、現在の江刺市立兒童公園広場の一部がそれである。

さて、山道は市道と重なつて一日市町を北進し、その北端の丁字路を右折し、横町を経由して六日町と川原町の交叉点を南進（右折）し、人首川に架かる大橋へと向つている。横町東端の交叉点付近が札場跡である。藩政時代の問屋街であった川原町には、現在も土蔵造りの商家が残つており、往時の面影をしのばせてくれる。この町の南端に浄土宗瑞雲山松岩寺があり、その境内に天文二年（一七八三）の南無阿弥陀仏碑（高さ九〇cm、幅六〇cm）がある。安永二年（一七七三）の松岩寺の「書出」によれば、同寺は「永禄十一年（一五六八）良豊上人開基」で、本山は仙台の淨土真成寺と伝えている。さらに、安永二年の「江刺郡片岡村・増沢村・餅田村之内、風土記村扱・無之分書出」（以下、「伊達左兵衛在所書出」という）をみると、松岩寺の古碑について次のように記している。

一、町名

右ハ御座御給士鋸木太夫相鉢木茂兵衛石碑ニ御座候、茂兵衛義基初小山ヲ称

・中城丸、右鋸木太夫相鉢木茂兵衛石碑ニ御座候、茂兵衛義基初小山ヲ称
・桑第三被仰付、義山様御代古内伊賀奥力ニ被召出、延喜七年死去仕候、茂兵
衛死後、右石碑は右京太夫様より御白筆之御詔書被成下、其碑直々切付置候由、

當時ハ苦むし被成其、御詔歌ハ相見得申候

無名のミミズクの印の石の本に
とじらふ物は松風の音

ところで、「安水風土記」に「土橋 長廿丈間、横式闊半、但シ片岡村

之内、岩谷堂町今村々ノ通路」と記されている大橋を渡ると、道は三叉路となり、すぐ右折して南進するのが黒石道、東南に進むのが氣仙街道である。

これに対して山道はすぐ左折し、人首川の右側に沿うて北東へと進み、増沢橋に至る。この間、大橋から約三〇〇m離れた東方の丘陵上に寶洞宗大藏山光明寺がある。（これは岩谷堂邑主岩城氏の菩提寺であり、同氏歴代の位牌多数を蔵している。なお、本堂は明治初期の大火によって焼失し、現存のものは明治に再建されたものであるが、その裏の墓地には、岩城氏歴代の墓碑二〇余基が述べている。次に、安永二年の光明寺の「書出」をかかげておこう。）

大藏山光明寺

応永年中日泉開基・御座候所、天正年中殿堂法系共焼失仕候ニ付、仙台松音寺、

代皇山和尚中興開基・御座候

一、片岡村

一、本山 仙台青洞宗松音寺

但シ往古ハ岡部黒石村止法寺未守・御座候と申伝候、天正拾四年癸卯右松音寺來寺

御座候、但シ光明寺來寺無之候事

・最初之地

同郡田谷村御座候由申伝候、何年之頃此地ニ移転仕候、年月相知不

申候

この光明寺の裏手が江刺市の向山公園であり、そこには、昭和四〇年に国

の重要文化財に指定された古民家として、岩谷堂地方の直屋の代表的な遺構を示す後藤家が移築されている。一方、光明寺の西側に真言宗岩屋山山多聞寺がある。安永二年の同寺の「書出」には、

喜洋平中慈光大師開基、天台宗御座候所、及退転真言宗・應成院、何年之頃今真言宗・相改候成、分明不相知候。天和五年在山城國上之櫛觸寺院殿真木寺應成院、開基寺第、世延之嗣、後代相知不申候。

一、片岡村

一本山 山城國上瀬賀真言宗御座院殿

門徒 同村 医王山真言寺

一、古物六品

一、金色不動之鎧像 一組 但シ弘法和尚筆

一、刷手姿不動之鎧像 一組 但シ弘法和尚筆

一、彩色絵之不動 一組 但シ弘法和尚筆

一、大日如來像 一組 但シ弘法和尚筆

一、南無極子參詣經 一組 但シ弘法和尚筆

一、愛染明王經像 一組 但シ天台智収大師筆

一、開基 慶雲大師 (以下略)

と記されているが、明治初年の大火で焼失したままとなつておらず、現在はそ

の跡のほとんどが市の施設に転用されていて、往昔の面影はない。境内には、

角には、「安永風土記」に「別当多聞寺、祭日六月朔日を三日迄、三間四面、

長床門鳥居共南向ひ相建申候」と記されている毘沙門堂があり、その付近

には元禄二六年(一七〇三)の奉供養庚申碑(高さ一〇〇cm、幅六〇cm)、正

徳二年(一七二二)の梵字供養碑(高さ九五cm、幅五五cm)、享保二七年(一

七三三)の奉供養庚申碑(高さ七〇cm、幅六五cm)、同年の奉供養愛宗明王碑(高さ七十五cm、幅四〇cm)、慶延二年(一七四九)の奉供養己巳碑(高さ六五cm、幅四〇cm)、安永六年(一七七七)の庚申己巳供養塔(高さ九五cm、幅四

五cm)、寛政五年(一七九三)の庚申供養塔(高さ八〇cm、幅五〇cm)、文化八年(一八一一年)の湯殿山・金剛羅・金華山碑(高さ一〇五cm、幅六五cm)、

同一年の馬頭観世音碑(高さ六〇cm、幅五〇cm)、嘉永五年(一八五二)の山

神碑(高さ八〇cm、幅五五cm)、文久三年(一八六三)の馬頭観世音碑(高さ

七〇cm、幅五〇cm)などの石碑、七基が放置されている。さらに、鬼沙門堂

の前には、道標をかねた文化六年(一八〇九)の庚申碑(高さ一八〇cm、幅上部三〇cm、下部五五cm、厚さ一〇cm、井内石)が建っている。この碑の

頂部は約二三〇cm欠損しているものと思われるが、もとは大橋の東詰にあつたものである。碑面には次のように刻まれている。

「

文化六年

庚申

甲子

己酉

五月朔日

右ハ東山さる沢

中ハいて町けせん

左ハ人かへとの

小重原久助

小重原久助

小重原久助

小重原久助

ところで旧道は、前述のことく、大橋の東たもとで左折し、向山の麓を人

首川に沿って通上り、重染寺跡を経て約一〇〇mほどで増沢橋(裏町橋)に至る。ここが藩政時代の片岡村と増沢村(ともに江刺市)との境であった。

同橋の北詰に位置する前田町は往時の足輕町である。現存する足輕屋敷は一軒のみであるが、わずかに往昔の面影をしのばせてくる。これとても現今のは改築ブームの中でやがて消滅しようとしている。すみやかに保存の策を講ずる必要があろう。増沢橋は「安永風土記」に「一土橋、長拾八間、横式、間半、但シ右同所(岩谷堂町)」と増沢村(?)の通路、橋半分片岡村分」とあるように、以前は木造土橋であったが、数年前に木造板橋(長さ約一九m、幅一・九m)に架け替えられた。現在は人吉川の西岸に新しく県道が開かれていたため(八甲切通し)、この橋はわずかに地域住民によつて利用されているだけである。

増沢橋から約四〇〇m西の船山(標高一五m余)の中腹に、江刺城(岩城館)跡があるが、現在は岩谷堂高校のグラウンドとなつてゐるため旧態をとどめず、わずかに城の一部を残すのみである。「伊達左兵衛在所書出」をみると、この館について次のようになつて記している。

右ハ往古より江刺之本城有り、其と申由・而有之廢れ、天正年中・ハ島西家江刺氏
旗相争と申者尼城・御城也。成化十九年・秀吉公義西家御征討之節、大野新田少輔萬
賀之城・山中佐無。其以後領分木村伊勢守は被下、同人より佐瀬伯氏、栗野九
左衛門・申者城代・指揮使也。而此之内葛西之諸役人百姓一揆ニ付、兩人没落
之由、其後貞山様御領・相成、猪苗代長門・申人主被下領由ハ相見得御得候、
右店舗品ハ相知不申候。又以空折板漆政事・被下領市申候、大より古田伊豆、
増田井藍吉等、藤田信馬、古内伊賀等段々之城代被下領兼中申伝候。

万治式年八月廿八日 雄山源氏代、茂苗代周防を以て兵衛宗見石造地御座候

七年取移以至当時迄代々住居仕候

この館跡から二〇〇 m北東に、延慶四年（一二二一）の古碑（高さ一・二〇
m、幅二〇 cm、六面石）と岩城氏の奉祀したと伝える八幡社がある。これらに
ついて「伊達左兵衛在所書出」は、

一、八幡社

右別當と申度無之、本丸番之小人組之内始末仕候、宮八至度小ク鳥居具・南向、
祭り日八月十五日、御座候

二、石碑

之名前梵字文字具、見得蒙中候

と述べている。さらに、館下には家臣町（桜小路）の一部が残っており、家
中屋敷が旧態のまま一戸現存しているが、これとても近い将来消滅の運命に
あるので、緊急にその保存策を検討すべきであろう。

増沢橋を渡り、前田町を北上する旧道は、県道と合流する手前約一〇〇 m
のところで右折し、人首川に架かる小名丸橋まで進む。右折してから約一〇〇
mの間は幅二・五 mの旧道が現存し、昔日の面影をよくとどめている。小名

丸橋の先は、耕地整理によつて道筋も消え失せて定かではないが、やがて中
野付近で県道と合流し、その先は県道の北側を走る市道とほぼ重なつて進み、
その後、ふたたび県道と合流しながら新山神社前に達している。その間、前

地点に鬼沙門堂がある。ここには、中世の作といわれている一本彫の鬼沙門
天像が本尊として安置されている。さらにも中野地内は、前述のごとく、耕地
整理によつて旧道は消失し、その痕跡すらとどめないが、県道の東側の
畑の一角に、宝永五年（一七〇八）の熊野三所大権現・象頭山・大聖山碑（高
さ一・〇〇 m、幅八五 cm）、享保四年（一七一九）の南無阿弥陀仏碑（高さ九〇
cm、幅六五 cm）、宝曆二年（一七六二）の同碑（高さ六〇 cm、幅五〇 cm）、
天明七年（一七八七）の同碑（高さ六〇 cm、幅六〇 cm）、文政五年（一八二二）
の金毘羅山碑（高さ八〇 cm、幅六〇 cm）などが一列に並んでおり、旧道筋で
あつたことを物語つている。なお、宝永五年の石碑は、江刺市内における熊
野諸の記年銘碑としては最古のものである。この石碑群から約八〇〇 mほど
北東に新山神社があり、ここは旧増沢村の郷守であった。同社境内には享保
二年の庚申碑（高さ八〇 cm、幅二五 cm）、寛政三年（一七九一）の愛宕山大權
碑（高さ一・〇〇 m、幅七〇 cm）、同七年の南無阿弥陀仏碑（高さ一・〇〇 m、
幅七五 cm）、文化二年（一八〇五）の梵字供養碑（高さ四五 cm、幅四五 cm）、同
二年の庚申碑（高さ八〇 cm、幅二五 cm）、文政五年（一八二二）の金毘羅山
碑（高さ一・〇〇 m、幅四五 cm）、文政四年（一八二二）の馬頭觀世音碑（高さ七〇 cm、
幅五〇 cm）、天保七年（一八三六）の馬頭觀世音碑（高さ七五 cm、幅六五 cm）、同二年の
二聖山碑（高さ一・五 m、幅二二五 cm）、弘化四年（一八四七）の天照皇太神
碑（高さ一・四五 m、幅八〇 cm）、文久二年（一八六二）の馬頭觀世音碑（高さ
一・二〇 m、幅四〇 cm、六角柱）など、九基がある。その多くは道路工事の際
に他から移築したものである。

さて旧道は、新山神社の辺からほぼ県道と重なつて約六〇〇 m進んだ地点
で、県道と分かれその左側の高屋敷の坂を登り、高杉塚と玉崎駒形神社鳥
居前を経由して船坂をくだり、ふたたび県道と合流している。その間、蒲政
時代の増沢村と次丸村（ともに江刺町）の境となつていた高屋敷坂を登りつ

めた所、ちょうど新山神社から約一回東の地点に高杉塚がある。これが四

町里一里で、七里塚といわれているものであり、施制のようになっている。

旧道の左側に一基（東西約六m、南北約五m）だけ残存し、その頂上に文政三年（一八二〇）の金毘羅宮碑（高さ八五cm、幅六〇cm）が建っている。塚の保存状態は良好である。高杉塚を前後する約六〇〇mの区間は、明治期まで使用されていたところであり、当時の荷馬車の通行によって、道幅は約四mと拡張されてはいるものの、旧道の面影がよく残されている。

田次丸村の鎮守であった玉崎駒形神社は、拝殿・本殿・馬頭観音堂・神楽殿・境内社・木馬殿・宝物庫などからなり、地域住民の信仰の中心地である。同社境内には多数の石碑群が林立している。まず旧増沢村からの参道には、

享保四年（一七二九）の奉己供養塔（高さ六五cm、幅六五cm）、寛政三年（一七九〇）の蛭谷大明神・最勝弁才天・御崎大明神・平池峯大権現・愛

古大権現供養碑（高さ一二五cm、幅一〇〇cm）、同七年の庚申碑（高さ五五cm、幅四五cm）、享和二年（一八〇二）の大聖山大権現碑（高さ八〇cm、幅七〇cm）、

文政二年（一八三〇）の熊野三社大権現・金毘羅大権現・大聖山碑（高さ一五〇cm、幅九〇cm）、天保九年（一八二八年）の馬頭観音碑（高さ三〇cm、幅

一五〇cm、幅七〇cm）、文化元年（一八〇四）の南無阿弥陀仏碑（高さ六五cm、幅七〇cm）、天保二年（一八四二）の同碑（高さ一六〇cm、幅五〇cm）の二基が建っており、道標には次のように刻まれている。

次に、田次丸村からの参道には、享保二年（一七二七）の南無十一面觀

世音菩薩碑（高さ一五〇cm、幅八〇cm）、寛保元年（一七四一）の南無阿弥陀佛碑（高さ一五〇cm、幅七〇cm）、文政二年（一八一九）の金毘羅山碑（高さ九〇cm、幅六〇cm）、天保二年（一八三二）の南無宮碑（高さ八五cm、幅五五cm）、同年の馬頭觀音碑（高さ三五cm、幅一五〇cm）、天保二年（一八四二）の同碑（高さ五五cm、幅一五〇cm）、弘化二年（一八四六）の同碑（高さ四五cm、幅二五cm）など、

のほかに、明治二十五年の青麻神碑、同年の月山神社・出羽神社・湯殿山神社碑、同四四年の觀世音碑、人正一四年の馬頭碑がある。また、同社の境内に

つづく東尾根には、中世の真止場（真羽羽）跡跡がある。さらに、蛤坂が県道と合流する手前の旧道左側に清水があり、現在も飲用に供されている。蛤坂については、安永二年（一七七二）の田次丸村の「風上記御用書出」以下、「安永風土記」というに、「一坂 巻ヶ所 蛤坂」、但次丸村之内谷岩谷堂町人首町野子崎町之通用」と記されている。

〔3〕蛤坂一人首

蛤坂をくだった地点で県道と合流した旧道は、そのまま約一〇〇m進んで右手に分歧し、その先はずっと県道と異なったルートを東進するが、その分歧点の通称木の下には、明和八年（一七七二）の南無阿弥陀仏碑（高さ九〇cm、幅七〇cm）、文政二年（一八一五）の熊野山大権現・金毘羅宮・大聖山碑（高さ一七〇cm、幅一〇〇cm）がある。この付近は草地の中に旧道がわざわざ往昔の面影をとどめている。この石碑群から県道と人首川の間を北東に進む旧道は、やがて中島橋に至るが、その手前で野手崎道が分岐している。

その分歧点の松樹の根元に安永元年（一七七二）の供養碑をかねた道標（高さ一二五cm、幅七〇cm）、文化元年（一八〇四）の南無阿弥陀仏碑（高さ六五cm、幅七〇cm）、天保二年（一八四二）の同碑（高さ一六〇cm、幅五〇cm）の二基が建っており、道標には次のように刻まれている。

〔

安永元年七月廿日

大乘妙典字札書写供養
幼住止光拂靜圓謹記

左のとおへ道

」

この道標付近の旧道は農道に改良されているが、野手崎道の方はわざわざに旧道をとどめおり、往昔の面影がしほばれる。「安永風土記」に「中島橋、長三間、橋式簡便、但次丸村之内、岩谷堂町人首町之通用」と記さ

れている中島橋を渡ると、旧道は人首川の南側を走っていたが、約二〇〇mほどどの区間は道筋も定かではない。その後、農道に改良された旧道筋を約四〇〇m東進すると、安永二年（一七七二）の角掛村（江刺市）の「風土記御用書出」（以下、「安永風土記」という）に、「上橋、長六間、横三間半、但岩谷町（今人首町）之通用」と記された矢ノ目橋に至り、そこから信行寺前を通じて赤坂に達する。「安永風土記」に「赤坂 但角掛村之内、人首町今岩谷堂町」（之道）とあるのがそれである。この赤坂の入りにある民家から道らしい面影をわずかにとどめている。

信行寺から約八〇〇m東の下桶茂井野地内で、旧道は農道に改良された道筋を東進し、六百刈田の七里塚に至るが、その間の樺茂井野地内に大塚大明神がある。「安永風土記」に「一明神社、但別当地主御百姓移左衛門、祭日九月廿二日、社三坪四面、鳥居共南向、相立中祭」と記されているのがそれである。境内には文化一〇年（一八一三）の大塚櫛荷大明神碑（高さ七五cm、幅二〇cm）、同一年の金華山塔（高さ七五cm、幅四八cm）、文政三年（一八二〇）の金毘羅山碑（高さ七四cm、幅七七cm）、同一年の山神碑（高さ六〇cm、幅五〇cm）、嘉永二年（一八四九）の金華山碑（高さ六八cm、幅四九cm）、文久四年（一八六四）の馬頭觀音碑（高さ三五cm、幅五cm）、慶應二年（一八六七）の馬頭觀世音碑（高さ五〇cm、幅二五cm）などのほかに、明治期の石碑、基と文化九年（一八一二）の石燈籠（基（火袋欠））がある。

この大塚大明神から約五〇m南を東西に走る旧道は、そのまま六百刈田地内を東進し、七里塚を経由して羽山神社（人首）前で市道と合流している。その合流点に至る約一kmの区間は、現在は農道として利用されているが、旧道の面影がよく残っており、とくに、市道との合流点付近は昭二・五m前後の旧道が、近くの草葺きの農家とあいまって往昔の風情を呈している。その途中の旧道北側に、文化一年（一八〇五）の南無阿弥陀仏碑（高さ六五cm、幅四〇cm）、享保二〇年（一七五五）の大弁財天女碑（高さ八一cm、幅五・一cm）、寛保九年（一七四一）の南無阿弥陀仏碑（高さ三二cm、幅七〇cm）、寛延四年

（一七〇〇年）、文政一〇年（一八二七年）、大明神碑（高さ七〇cm、幅二五cm）、同一年の熊野二所大權現・大率山大權現・象頭山大權現碑（高さ一七〇cm、幅二〇cm）、天保二年（一八三二）の弁才碑（高さ七〇cm、幅四〇cm）、同七年の産神碑（高さ七〇cm、幅五〇cm）、同一〇年の八幡宮大日如來碑（高さ五〇cm、幅二〇cm）、嘉永七年（一八五四）の庚申碑（高さ五〇cm、幅四五cm）、安政二年（一八五六）の馬頭觀世音碑（高さ五〇cm、幅二五cm）、明治四〇年の保食神碑などが並んでいる。

この六百刈田の石碑群から約一〇〇m東進した旧道の南側に、並木松五本が建つおり、旧道筋であったことを感じさせる。ここからさらに人首・伊手道を横断して約一km余進んだ地点に、六百刈田の七里塚があり、旧道の北側に一基だけその名残りをとどめている。塚はその北側の畔上約一mのところに位置し、南側は農道として利用されている旧道の改修工事によって、道路面とほぼ同一の高さとなっている。径約四mほどであるが、藪草が繁茂していく塚の形は定かでない。その中心と目されるところに桜の老木が一本そびえており、その根元に享保二年（一七二八年）の南無阿弥陀仏碑（高さ一五cm、幅六〇cm）、安政七年（一八六〇年）の早池峯神社碑（高さ六〇cm、幅四〇cm）、万延元年（一八六〇年）の馬頭觀世音碑（高さ六五cm、幅四二cm）の二基が倒れかかっている。この塚なども旧道関係では数少ない現存例なので貴重な街道路關係の文化財として保存を講じたいものである。

六百刈田の七里塚から約七〇〇m北の上桶茂井野に曹洞宗懸角山瑞徳寺がある。安永二年（一七七二）の同寺の「書出」によれば、「文安式年二月笑岩慈忻和尚開基」で、本山は黒石村正法寺と伝えている。本堂は藩政時代の建築といわれており、その境内には宝永三年（一七〇六年）の有縁無縁一界万葉碑（高さ一三〇cm、幅九二cm）、同年の南無阿弥陀仏碑（高さ一〇cm、幅四〇cm）、享保二〇年（一七五五）の大弁財天女碑（高さ八一cm、幅五・一cm）、寛保九年（一七四一）の南無阿弥陀仏碑（高さ三二cm、幅七〇cm）、寛延四年

年（一七五二）の大乘妙典寺宇供養碑（高さ九九cm、幅六〇cm）、宝暦二年（一七六二）の南無阿弥陀仏碑（高さ一〇〇cm、幅四八cm）、文政八年（一八一五）の同碑（高さ一八〇cm、幅六〇cm）、天保五年（一八三四）の早池塚・岩鷲山大権現碑（高さ一二六cm、幅六七cm）、弘化三年（一八四六）の南無阿弥陀仏碑（高さ一六五cm、幅八〇cm）など、六基の石碑のほかに、無年号の首無地蔵（高さ一〇〇cm）や六地蔵が建っている。首無し地蔵は同寺の南方の住置場と伝承されているところから門前に移築されたものである。

ところで旧道は、六百刈田の七里塚から約八〇〇m東進した地点で、前述のとく、市道と合流しているが、その合流点に文化五年（一八〇八）の羽山人権現碑（高さ一・一・四cm、幅七〇cm）、文政五年（一八二二）の金比羅大権現碑（高さ八五cm、幅七五cm）、文久一年（一八六二）の能野山大権現・大峯山・金毘羅宮碑（高さ一二〇cm、幅一五〇cm）、同年の山神碑（高さ六七cm、幅五二cm）などのほかに、明治期の石碑四基がある。この石碑群から約二〇〇m北の長倉沢に羽山神社があり、「安永風土記」は「羽山山権現社、但別當地主修驗高寺院、祭日四月八日、九月八日、社宅四面、鳥居及床共西向、相建中候」と記している。同社の境内には文化三年（一八〇六）の羽山権現碑（高さ一・一・四cm、幅七〇cm）など七基の石碑が建っている。

市道と合流して東南に進む旧道は、本町から白石沢を経て法鏡印所をくだけ、やがて人首川支流の川子野川を渡つてから伊手道を横断し、その先は玉木沢地内のなだらかな坂を登り、県道から南に約一km離れた尾根をたどつて東進している。その間の本町付近の旧道左側に、寛政二年（一八〇〇）の「山供養碑（高さ一〇〇cm、幅七五cm）、天保八年（一八三三）の馬頭観音碑（高さ四五cm、幅二〇cm）など六基の石碑が一列に並んでいる。さらに法鏡印所の北側付近にも、享保七年（一七二二）の南無阿彌陀仏碑（高さ一〇〇cm、幅九〇cm）、宝暦二年（一七五二）の同碑（高さ一五〇cm、幅六七cm）、

養塔（高さ九五cm、幅四五cm）などがある。そして川子野川から約五〇〇m北東の峰の後に地蔵堂があり、その中に石地蔵（縦高一〇〇cm、花崗岩）が旧道に南面して鎮座している。周囲一面が水田化している現在、地蔵堂のある小さな森だけが目立つが、その境内には延享五年（一七四八）の南無阿彌陀仏碑（高さ一・一・四cm、幅六五cm）、寛政二年（一八〇〇）の「山供養碑（高さ八五cm、幅六五cm）、文化一年（一八〇五）の金毘羅山碑（高さ六五cm、幅二五cm）など八基の石碑が建っている。

さて、旧道であるが、地蔵堂のところから約一・二km東進する区間は、旧道が農道として利用されており、昭和二七年頃の耕地整理によって、道幅は二・四mと拡張されているものの、ところどころに並木松が残っており、往昔の面影をかすかにのぼさせてくれる。そこから約一〇〇mほどで、七里塚を東方としている下谷地の家々に至るが、その間の旧道筋は定かでない。家々のある地点は、六百刈田の七里塚から約四km離れたところなので、以前には七里塚があったものと思われるが、戦前の農道改修や近時の新道開削工事などによつて、旧来の地形が一変しているために、塚の跡跡すらとどめず、ただ「七里塚」の家号のみが残されている。この家々から約六五〇m北の阪本地内には、安永一年（一七七三）の「人首村（江刺市）の「風土記御用書出」以下、「安永風土記」というに、「山觀音堂、但別当地上御百姓伊左衛門、祭日三月十七日、堂三間四面東向、横額筆者法山和尚」と記されている山ノ上觀音がある。ここは江刺三觀音の第一・八番札所であるなお、同堂に祀られている仏像は平安時代のものといわれているが、損傷がいぢじらしい。

一方、家々のところでは市道と合流した旧道は、そのまま市道と重なつて約二〇〇m進んだ地点で右に分岐し、その後、旧道の面影が残る道路を約一km東進すると、雜木林の中で廻遊状になつている旧道の右側に、宝暦二年（一七六二）の道標（高さ四〇cm、幅一九cm）が北向に建っている。その道

標には次のように刻まれている。

「 宝勝寺大
右 いはやとう道

向 左 いと東山道

八月二十日

この道標をすぎると、旧道は左にほど直角にカーブしてやがて市道と合流し、そのまま市道上を東北に進み、「安永風土記」に「御同人（沼辺越後）様御預足軽、家教式拾軒、馬場と申所・御座候」とある御預足軽町を経て、人首町南端に達する。

(4) 人首七里塚

人首町は人首川の東岸で、かつ館山の西麓を北東にのびる一本町であるが、藩政時代は仙台藩の重臣「所持領」であった沼辺氏のいたところであり、町の北部右側に入首番所があつて、人馬貨物の取締りにあつた。現在は造構らしきものは何一つない。また、町の東裏丘陵上に沼辺氏の人首館跡（標高三〇〇m、東西二五〇m、南北二二〇m）があり、その東続きに白山社がある。同社について「安永風土記」は、「白山社（沼辺氏所持領内在）但別当地主御百姓久吉、祭日二月二日、長床鳥居共南向・相建中候、横額筆者当村白徳寺先住・桃和尚」と述べている。さらには「安永風土記」をみると、「寺式ヶ寺」として次のよう記している。

・沼辺氏所持領内・久吉・白山社
福泉寺、客殿共西に向相立申候、横額筆者神速和尚

・沼辺氏・客殿共東向・相立申候、横額筆者神速和尚

右のうち、人首川西岸の丘陵中腹にある龍首山白徳寺は、人首館主沼辺氏歿代の位牌所であり、安永二年（一七七二）の同寺の「書出」は、「慶長十

一年十二月仲庵存の開基・御座候、本山・相馬小高道慶き、末寺無御座候」と伝えている。一方、法門山福泉寺は、この白徳寺から約七〇〇m東南の馬場にあつたが、明治年間に廢絶し、寺号は遠野に移された。なだ、同寺の「書出」によれば、「慶長拾七年有海印建立、何月と申儀ハ相知不申候、本山、大和国長谷寺小池坊、本寺無御座候」と伝えられている。

ところで、藩政時代の人首町には六筋の道があつた。「安永風土記」に、(4)「五輪、人首町分當都（上閉伊郡）遠野町之道、此所御境御番所、御兵具被相渡、御役人様御勤仕被成置候」(5)「黒木、人首町分野手崎町之道、都出瀬村之道」(6)「木手驕、人首町分伊手町之道」(7)「馬驕、人首町分谷當町之道」(8)「鹿驕、人首町分野手崎町之道」(9)「板橋、人首町分氣仙郡世田米町之道」とあるのがそれであり、うち(2)と(6)の道筋が旧道にある。

さて、人首町の南端で併形状に右折する旧道は、福泉寺跡の北側を東進して市道と合流するが、その間の旧道は畦や藪地となつていて、徒步での通行も困難である。市道との合流点から約六〇〇mほど市道と重なつて東南に進む旧道は、やがて古館で市道から左手に分岐しているが、その分岐点付近の山中に無年号の道標（高さ四五cm、幅二五四cm）があり、それには「向 右ハ山みち（山道）」と刻まれている。この道標付近からさらに東南に進むと、長下の七里塚跡に達する。塚は昭和三〇年頃の水田開発と市道の付替工事などによつて消滅し、今はその痕跡すらとめられない。この七里塚跡に至る約七〇〇mほどの区間の旧道は、現在廢道となつてゐるが、市道の東側の山林中にかすかに残つており、往昔の面影がわずかに感じられる。

旧道は長下七里塚跡付近で市道と合流するが、その三叉路付近の道路北側の路肩に、文化三年（一八〇六）の大井大尊天・八掛本尊・愛宕大権現碑（高さ一三〇cm、幅七八cm）、同二年の十三仏像線刻碑（高さ一二五cm、幅六六

（四）文政九年（一八六六）の金尾羅宮碑（高さ七・四m、幅六〇cm）、慶応三年（一八六七）の金華山碑（高さ・五〇m、幅六〇cm）など、全部で九基の石碑が一列に並んでいる。市道と合流して東に進む旧道は、向平當で市道の左手に分かれ、その先は定かではないが、そのまま東進して県道と人首川を横断して滝壺に至り、さらに入首川東岸の山居下を経由して、県道の右側を流れる人首川に沿って週上しながら二又番所跡に達する。人首川北岸の山裾にある番所跡は、現在水田化されているためその痕跡すらとめいない。

なお、この番所跡の西方に位置する丸才坂の道路脇には、文政二年（一八〇〇）の南無阿弥陀仏碑（高さ九・四m、幅六〇cm）、天保二年の山神碑（高さ一・〇m、幅六・五cm）、安政二年（一八五五）の己未塔（高さ一・〇〇m、幅六・〇m）、無年号の南無三世切諸佛碑（高さ一・〇m、幅四・〇m）などのほかに、馬頭観世音碑（高さ七・〇m以下）七基が建っている。

旧道は二又番所跡から約七〇〇m東進したところで、人首川支流の山本川を渡って山本七里塚に達する。塚は昭和の初期まで旧道の両側にあつたというが、今はない。なお、山本橋の南詰には、山本七里塚の右側の塚頭にあつたという明治元年（一七六四）の青面金剛童子碑（高さ一・五〇m、幅三・〇m）のほかに、享保二年（一七二八）の馬頭観世音碑（高さ一・〇〇m、幅七・五cm）、同・〇年の南無阿彌陀仏碑（高さ九・〇m、幅四・五cm）、文政二年（一八一〇）の馬頭観世音碑（高さ七・〇m、幅二・八cm）、文政二年の同碑（高さ六・五cm、幅五・〇m）、天保二年の同碑（高さ五・〇m、幅二・〇m）など七基が倒伏している。この山本橋南詰の古碑群のところから東へ約八〇〇mの間、旧道が残っていないが、その先はほとんど通行不可能で、山本川に沿って週上しながら種山七里塚へと向っている。

種山七里塚は、山本七里塚跡から四km東方の標高七・〇mの草原地帯にあり、ほぼ円形をなして二基現存している。右側の塚は高さ一・七m、往約七・二m、左側の塚は高さ一・五m、径約ハ・八mの規模であり、両塚の間隔

は約七mである。旧道筋で対をなし現存している塚はここだけなので、よることに貴重な交通関係遺跡といつてよい。将米にわたって長く保存するためにも、管理を十全にする必要が痛感される。

（5）種山七里塚～小府金一里塚

種山七里塚のある付近一帯は草原となつてゐるため、そこから約一・五km東南の物見山（種山、標高八・七〇m）の大岩がみえる。往昔の旅人が目標としたものであろう。この物見山のところが仙台藩領と盛岡藩領との境であつた。

旧道は種山七里塚から南下して、物見山の南麓を迂回しながら仙台藩氣仙郡内に入る。そして物見山から約五〇〇m西南の地点に無年号の道標（高さ五・〇m、幅二・〇m）があつたという。現在は岩手県営種山牧野事務所前の植込みの中に移されているが、それには「右ハ小友道 左ハ人首道」と刻まれている。氣仙郡内に入った旧道は、盛岡藩領の南側を藩境に沿つて東南に進み、夕日山（標高七・四五・九m）の南八〇〇m地点に達しているが、その間の旧道は定かではない。佐田町役場所蔵の「世田木村元禄絵図」なるものをみると、夕日山の南に藩境塚があり、そこから「仙能沢」「千能沢」と「赤坂沢（小般川）」に挟まれた尾根伝いを東南にくだる旧道は、「千六百間」で板橋の一里塚に達している。この一里塚は国右林の頂上付近にあるので、完全に残つてゐるということであるが、夏草や熊笹などが繁茂しているために調査は不可能であった。一里塚からさらに尾根伝いを東南にくだる旧道は、やがて千能沢が小般川と合流する手前の長崎に達するが、その間の坂道について、同絵図は「一千三百三十間、長崎坂」と記している。

この「長崎坂」入口付近の旧道は、大船渡営林署の林道開設によつて、千能沢に架けられた橋の北側部分が一部削除されはいるものの、その後後は、山林の中に幅約一m前後の旧道が數本などにおおわれながらかすかに残つて

いる。一長崎坂の登り口をすぎると、旧道は国道一〇七号線（以下、国道という）と合流し、すぐその右方に分かれて東南に進み、やがて国道に沿つて流れる大股川と、その東方を南流する小仁倉沢との合流点付近に達する。そこから約二〇〇mほど東進した地点に塚松（一里塚）があつたが、国道の改修工事などによって削り取られて今はない。塚松跡から約一〇〇m東の国道の北側には、岩窟の中に岩谷稻荷社が鎮座し、そこには文久二年（一八六二）の棟札「古谷稻荷大明神社」のほかに、文政一〇年（一八二七）の金毘羅大神碑（高さ六〇cm、幅四〇cm）など、基が建っている。国道はこの辺から逆U字型に大きくなり、東進して小股部落に通じているが、旧道の方は国道の北側に沿つて東進し、やがて小股川が氣仙川支流の大股川と合流する付近に達し、それから大股川を渡り、その先は雲南坂をはさんで約1kmにわたって、旧道が山林中に完全な形で残っている。

小股川と大股川との合流点から約六〇〇m北に、天正一九年（一五九一）に来住したという紺野家がある。同家は藩境見役や世田米村肝人などを代勤めた名家であり、同家の裏には享和二年（一八〇二）の棟札をもつ宇南権現社、文政四年（一八二二）の棟札をもつ熊野神社、安永九年（一七八〇）の棟札をもつ山の神社、天明二年（一七八二）の棟札をもつ垣衝神社、文政元年（一八一八）の棟札をもつ牛頭天王社、明和八年（一七七一）の棟札をもつ雷神社など、六社が刻まれている。紺野家から約五〇〇m東南の旧国道脇に小股の古碑群がある。宝曆九年（一七五九）の庚申碑（高さ一〇〇cm、幅二〇〇cm）、天明六年（一七八六）の庚申塔（高さ一〇〇cm、幅四〇〇cm）、享和二年（一八〇二）の馬頭觀世音碑（高さ五〇cm、幅三〇〇cm）、文化五年（一八〇八）の庚申己待碑（高さ二〇〇cm、幅一五〇cm）、同一年の馬頭觀世音碑（高さ一〇〇cm、幅一〇〇cm）、同年の庚申塔（高さ四〇〇cm、幅一〇〇cm）、天保二年（一八三一）の庚申塔（高さ四〇〇cm、幅一〇〇cm）、同年の庚申己待碑（高さ一〇〇cm、幅五〇〇cm）、弘化四年（一八四七）の馬頭觀世音碑

（高さ一〇〇cm、幅四〇〇cm）、万延九年（一八六〇）の金華山碑（高さ二〇〇cm、幅二〇〇cm）、文久元年（一八六一）の馬頭觀世音碑（高さ一〇〇cm、幅三〇〇cm）、元治二年（一八六六）の同碑（高さ六〇〇cm、幅二〇〇cm）、慶應元年（一八六五）の庚申供養碑（高さ一〇〇cm、幅四〇〇cm）などがそれである。このほかにも風化によつて碑面不明のものや、土中に埋没しているものなどがある。これらの古碑群は山林中の旧道筋にあつたものを移転し、一ヵ所にまとめたものである。

さて、山林中に完全な形で残つている旧道は、雲南坂をすぎると民家の裏手へと続いている。その先は定かではないが、大股川を渡つて国道と合流し、やがて国道の左手に分かれて東進しながら、国道と大股川を横断して柏里の一里塚に達している。この塚は杉林の中にあるのでほぼ完全な形で残つているが、広葉樹や夏草が繁茂しているために、その形状をくわしく調査することはできなかつた。塚から約二〇〇m東南に世田米村の消字であつた石祐神社がある。旧道は大股川南側の山裾を東進しているが、柏里一里塚から約五〇〇m進んだ地点から東北電力川口発電所までの間は明らかでない。同発電所の所から現存している旧道は、大股川に沿つてその右側を東進し、やがて大股川が氣仙川に合流すると、その川の南側を東南に進んでいく。そして氣仙川に架かる大渡橋の手前約一〇〇m付近で、川を渡つて対岸の小府金に至るが、その間の旧道は昔日の面影を隨所に残している。

氣仙川を渡つた旧道は、その後、同川に沿つてその北側を走つてゐるが、渡用点から約七〇〇mほど進んだ旧道の左側に、延享二年（一七四五）の南無阿弥陀佛碑、寛政二年（一七九〇）の庚申碑、文化五年（一八〇八）の庚申碑、同二年の「宮大明神碑」、文政二年（一八一九）の塙笠宮碑、同一年の庚申塔と庚申碑、文政二年の象頭山碑、天保二年（一八二九）と安政四年（一八五七）の馬頭觀世音碑、弘化三年（一八四六）の庚申碑など、全部で一四基からなる古碑群があるが、多くは倒伏したままで放置されている。

早急にその保存策を講じるべきである。この小府金の古碑群から約100m進んだ所に一里塚があり、旧道の左側に一基だけ現存している。その頂上には枝ぶりの美事な松が一本はえており、「小府金の塚松」と称されている。根元には寛政二年（1800）の念佛供養塔（高さ120cm、幅60cm）、文化六年（1809）の馬頭観音碑（高さ180cm、幅50cm）、文政二年（1819）の同碑（高さ90cm、幅40cm）、天保九年（1838）の同碑（高さ100cm、幅50cm）の四基がある。この一里塚に至る約100mの区間は旧道がそのまま残り、往昔の面影を伝えている。

（6）小府金一里塚→白石峰

小府金の一里塚をすぎた地点から、旧道はやがて国道を縦断してその北側約100mの地点を迂回しながら、氣仙川に注ぐ柿内沢へと進んでいるが、その間の旧道は定かではない。一方、仁田代への道が旧道から分岐して柿内沢に沿って北上しているが、その分歧点から約500m北の清水沢に、淨土真宗大谷派の片松山淨福寺がある。同寺は天文五年（1536）に氣仙郡吉浜村から移転されたものであり、現存する建物は寛政二年（1800）の再建という。仙台藩主や通見使などが本陣としたこの寺は、住田町最大の伽藍を有しており、その参道の右側には、樹齢四〇〇年と伝える公孫樹9本が並んでいる。

旧道はこの公孫樹並木の参道を進み、仁田代道に突き当った所で左折し、すぐ右に分岐して柿内沢を渡り、国道の北側を迂回しながら東南に進む。仁田代道の分歧点から約500m進んだ本町の旧道北側に、曹洞宗開祖圓滿藏寺がある。天正二年（1574）の開基と伝える同寺は、世田米城主であつた阿曾沼中務重範の菩提寺であり、その山門と鐘楼は藩政末期のものであるが、とくに、山門はすぐれた建造物として氣仙郡内に知られている。満藏寺から約150m進んだ松平には、樹齢二〇〇年はどの老松があり、「松鬼の松」といわれている。ここは世田米前に入る手前で、休みいた場所であり、

枝ぶりの美事な松の根元に腰をおろし、先行きの無事を願ったことから、「松鬼」の地名が生じたと伝承されている。その松の根元には、寛政九年（1797）の馬頭観音碑（高さ70cm、幅40cm）など七基の石碑がある。「松鬼の松」付近の旧道は、明治四年（1871）に県道ができるまで使用されていた。そこでさうに東南に進むと世田米宿に入る。

世田米宿については、安永の風土記が現存していないので、その詳しいことはよくわからないが、旧道筋における主要な宿駅であったから、内陸部の米穀類、沿岸部の塩や魚介類などの集散地として栄えた所であり、毎月の一三日と、二日には市が立てられていた。この宿の北側の小口洞に淨土真宗大谷派の石林山淨徳寺がある。慶長五年（1600）定兼和尚の開基と伝えるこの寺は、「世田米村元禄絵図」によると「玉泉坊」と記されているが、明治初年に淨徳寺と改めて現在地に移されたものである。さらに、同寺から約100m南の錦ヶ森に真言宗寶山光勝寺がある。承安年中に藤原秀衡が創建したと伝えるこの寺は、慶長年間に再建された。現存する本堂は安政年間に移築された後のものであるが、その本堂には、岩手県の文化財に指定された平安安井の阿修陀三尊像が安置されている。本尊の阿修陀如來坐像（高さ68cm）、脇侍の勢至菩薩坐像（高さ20cm）と觀音菩薩坐像（高さ20cm）がそれである。境内には鎌倉時代の梵字供養碑（基と、碑面の梵字が風化した古碑二基がある。なお、氣仙五金山の一つであった野尻金山は、平泉の藤原氏が經營したものと伝えられているが、当時數千人もいた懸子のために同寺能堂を建立し、中尊寺から仏像一軒を運んで安置したといわれているので、住田町には奇木造りの平安仏が伝えられている。光勝寺から約800m南の火石には、阿曾沼中務重範の居城と伝える世田米城跡があり、三段式城郭（山城）の空堀の跡と見張台が残存している。

さて、淨徳寺の門前を南進する旧道は、光勝寺の手前で右折して国道と合流し、そのまま約100m南進してから世田米宿のはば中央部分で左折し、

国道の東側を走る小口洞道を構断する。その先は定かではないが、小口洞道との分歧点から約六〇〇m 東進した日向の辺で右折する旧道は、国道とその南側を流れる中沢川を横断し、西風地内を中沢川に沿って通上している。その間の大崎の小枝坂には、旧道の右側に天保二年（一八四二）の庚申塔（高さ六五〇mm、幅四五〇mm）、弘化五年（一八四八）の馬頭觀世音碑（高さ五〇〇mm、幅二五〇mm）など四基が建っている。この小枝坂古碑群から約七〇〇m 東の西風地内に金成地藏堂があり、その中に寛政九年（一七九七）の学井和尚墓碑、同年代のものと思われる石地藏（總高七六〇mm、安政五年（一八五八）の地藏大菩薩碑（高さ六〇〇mm、幅五〇〇mm）がある。ここには次のような伝承がある。すなわち、光勝寺第五世学舟和尚は播磨國の生れであったが、その遺言によつてこの地の路傍に埋葬し、地藏尊とともに旅人の道とするべとしたといふ。この地藏堂の前後一〇〇m の区間に幅約一m の旧道がわずかに残つている。地藏堂から約一〇〇m 北の国道の左側に、寛政六年（一七九四）の馬頭觀世音碑（高さ六〇〇mm、幅二五〇mm）、文化二年（一八一六）の秋葉山碑（高さ一八〇〇mm、幅九〇〇mm）、天保二年（一八三三）の庚申塔（高さ一九〇〇mm、幅五〇〇mm）などのほかに、明治・大正期の碑五基がある。

金成地藏堂をあとにした旧道は、約二〇〇m ほど進んで左折して中沢川と

国道を横断し、すぐ右折してからは国道に沿つてその左側を北東に進んでいるが、その間の旧道はほとんど残っていない。上日向地内で旧道が梅ノ木への道と交叉する付近に、元文二年（一七三七）の庚申供養塔（高さ一四八〇mm、幅五〇〇mm）、享和二年（一八〇二）の金毘羅大権現碑（高さ九〇〇mm、幅五六〇mm）、文化二年（一八〇六）の田東山大神碑（高さ八〇〇mm、幅四〇〇mm）、同年の馬頭觀世音碑（高さ五八〇mm、幅二六〇mm）など六基が建っている。この古碑群から旧道の左手を北東に進む旧道は、やがて中沢公民館の裏手を廻り、国道から分岐している上城への道を構切り、さらに、国道と中沢川を構断して城内地内に至ると、千葉家の北側に、中沢の一里塚が旧道右側に、基だけ現存してい

る。左側のものは消滅しているが、その跡に寛政九年（一七九七）の梵字供養塔（高さ六〇〇mm、幅一五〇mm）、文政二年（一八・九）の馬頭觀世音碑（高さ六〇〇mm、幅一〇〇mm）、弘化四年（一八四七）の同碑（高さ五〇〇mm、幅一〇〇mm）、無年号の同碑（高さ七〇〇mm、幅二〇〇mm）の四基が一列に並んでいる。この中沢・里塚付近はわずかに旧道が残っている。

中沢・里塚から約七〇〇m 東進した所で国道と合流し、その先はほぼ国道と重なつて進む旧道は、やがて国道が左にカーブする地点で右手に分かれ、川鉄鉱業の鉛石置場の左側に達するが、その間の旧道は残っていない。その先は旧白石トンネル入口付近から山を登つて白石岬へと向う。そこが住田町と大船渡市との境界であるが、時に至る旧道は往昔の面影をよく残している。

(7) 白石岬へ盛

白石岬を越えると、旧道は旧白石トンネルに通じるみだらかな隧道をくだり、やがて長吉山で国道から分岐してある小野田セメント長谷鋸山への道と合流する。その間は往昔の面影を伝える旧道がよく残っている。鋸山への道との合流点で右折した旧道は、その先約二〇〇m で国道に達する。そこで国道と合流した旧道は、そのままほぼ国道上を東南に進んで山代屋敷に至る。そこから川内の辺までは、ほぼ岩手開発鉄道の通つてある敷地が旧道にあたる。

一方、田代屋敷で国道から分岐して北上する石橋への道があり、その西側を走る岩手開発鉄道の敷地（以下、線路という）は、ほぼ逆方に通じる旧道筋である。これが往時の小松峠を越えて遠野方面から盛にくる唯一のルートであった。この道筋にある岩手石橋駅から約一〇〇m 南に一里塚跡がある。これは本稿で取上げてきた既街道とは別なるルートのものであるが、昭和初年までは塚が残っていたという。現在は中島家の宅地の一部となり、ほとんどその痕跡をとどめていない。その一里塚跡から約七〇〇m 西方の国道の南に、家号を「法師石」と記して「ホッヂシ」と読む佐藤家がある。同家は一〇〇

年以上も経たと思われる古民家で、ほぼ完全に近い旧建築様式をとどめており、老人だけの生活も昔のままの姿で残されている。貴重な文化財として、その保存策を早急に講ずる必要があろう。

ところで、前述のことく、田代屋敷へ通じる道が国道から分岐して、いるが、その分岐点から約一五〇m北に離れた地点に山神神社があり、同社への登り口と社の裏側に数基の石碑が建っている。旧道はその分岐点まで国道とほぼ重なって進んできたが、その先是西道の右側を走る線路上を東南に進んで日頃市駅に至る。同駅から約一五〇m東の関谷に五葉神社があり、そこの本殿内には、猪川村（大船渡市）の長者稻子沢（鈴木）家が所有しているという美事な社殿が移されている。さらに、同社から約二〇〇m東にある関谷洞窟は、原住民の住居跡であるが、原形のまま保存されている。日頃市駅をすぎると、旧道は線路と国道の間を南下し、国道が左に大きくカーブする付近から、その北側を走る線路上を東進し、川内地内で国道が右に折れて南進するのと同様に、旧道も国道の東側を流れる盛川と線路の間を南下して長安寺駅付近に達する。その間、旧道筋の西側の橋口沢には、橋口沢ゴトランド紀化石産地があり、沢の両側全部が国の指定となっている。関谷洞窟から約一三km南の地点である。一方、長安寺駅から約二〇〇m北西に、浄土真宗大谷派の片杉山長安寺がある。寺伝によれば、もとは天台宗であったが、明徳年（一二九二）に真宗に転じたという。同寺は約二〇〇戸の住家を有する東北有数の大寺であり、その建築の壮大さは目をうばるものがある。境内にある淨心寺と西法寺の兩院は、もとは僧侶の住居であつた坊の昇格したもので、いずれも下寺と通称され、本寺の支配を受けている。そのほか、境内の背後の山腹にある奥州しだれ桜（一本、樹齢約四〇〇年）と、境内の公孫樹（樹齢四二〇年）は、いずれも大船渡市の文化財に指定されている。

長安寺駅付近から先の旧道は、盛川と線路にはまれ川沿を、権現堂橋に

向って東南に進んでいる。その間で、盛川の右手を走る國道から大野道が分岐しているが、その分岐点付近の國道の右側に、天明五年（一七八五）の大野道開通記念碑（高さ一五〇cm、幅五〇cm、四角柱）が建っている。そこから約二五〇mほど東南の久名畑に、稻子沢を家号とする鈴木家がある。同家は明治四五年に没落したが、藩政時代にあつては氣仙地方を代表する有力な商人であり、綾里（三陸町）の千田家文書によれば、江戸の柏原屋鈴木小四郎などとも取引のあったことが知られる。前述の大野道も同家によって開かれたものである。現在は隣盛をさわめた往時の姿はないが、広大な庭園と五葉山神社に移された美事な社殿などから、その豪勢さの一端をしのぶことができる。その庭園の一角には秋葉神社を氏神として祀り、その社殿は扇形（末広がり）に造られている。家運の末広がりに隣盛ならんことを願ったとい。権現堂橋に至る前の旧道は、盛川の堤防の所を通っていたが、近時の河川改修工事によつて姿を消し、さらに、同橋から約二〇〇m北西の堤防付近にあつた一里塚も破壊されて今はない。なお、一里塚のあつた所で旧道から山築石街道が分岐していたが、その分岐点にあつた安政二年（一八五五）の道標（高さ一四〇cm、幅一〇〇cm）は、現在、猪川地区公民館の所に移建されている。その道標には次のように刻まれている。

「

右

吉浜唐舟
はまなんふみち

南無阿彌陀佛

左

有住世田米
おかなんふみち

この道標から約四〇〇m北にあって、県合閑亭舎の左手にみえる丘陵が新沼二右衛門の跡跡であり、そこに猪川町神社が鎮座している。さらに、同社から約八〇〇m北東に脛口地蔵尊がある。一方、権現堂橋から約四〇〇m北

東の立根川右手の丘陵に及川土佐守の館跡があり、そこからさらに約八〇〇m東の長谷堂に真言宗智山派の龍福山長谷寺がある。同寺は天慶九年（九四六）醍醐寺第二世淳祐の開山と伝えている。現在は無住（部落管理）のため荒廃が進んでいるが、境内の觀音堂は氣仙三觀音の第三番札所であり、その前には石燈籠一基のほかに地藏と弁天像各一基がある。その右に新榮された取藏庫には、阿弥陀如來坐像（高さ七七・四cm、県指定）、南觀音立像二幅（高さ二三・三cm、県指定）、七四〇cm、九〇〇cm、市指定）、聖德太子像（高さハ九・四cm、市指定）、不動明王像（高さ八七・四cm、市指定）のほかに、繪馬六面などが完全に保存されている。繪馬の中には正徳四年（七一四）、明和九年（一七七二）、寛政二年（一七八一）、文化五年（一八〇八）、同六年、文政八年（一八二五）、天保五年（一八二四）、同八年、安政六年（一八五九）などの銘をもつたものがある。さらに、同寺境内には治承三年（一一七七）、弘安元年（一一七八）、文保二年（一一八一）、寛文二年（一一六六）、元禄〇年（一一九七）、正徳二年（一一九八）などの銘をもつた供養碑のほかに、無年号の梵字供養碑、享保七年（一一七、一二）の大乗妙典六十六部供養碑、享和二年（一一九〇）の法華一字・石塔、文政二年（一八一九）と天保二年（一一九二）の馬頭觀音碑などがあり、全部で二〇数基を数える。

さて、盛川の改修前の堤防と重なって進んできた旧道は、極端な橋の手前で国道四五号線（以下、国道という）に合流し、そのまま同様を渡つて盛前に入る。本橋で取上げてきた盛街道はここが終着地である。なお、極端な橋の手前

と、すぐ左手に県道が分岐しているが、その分岐点には、旧道の目印となる観音碑、万延元年（一八六〇）の庚申日塔、年号不明の南無阿彌陀仏碑の六基が建っている。そして国道がほぼ南北に走る盛街道の西側には天照御祖神社、淨願寺、洞雲寺などがある。まず、天照御祖神社の境内には、「はる

もやけしきととのふ月と梅はせを」と刻まれた天保二年（一八四四）の芭蕉句碑があつたが、昭和五一年の神社火災で焼け絶けて失ってしまった。さらに、同社務所の前庭に天保二年（一八三二）の熊野大權現碑があるが、その裏面に「木の下は汗も陰もきらかな翁」と刻まれている。淨願寺南側の丘陵地帯が根城跡であり、その一角に敏達天皇の第三子を葬ったという王子陵があり、そこに王子陵碑（高さ一五〇cm、幅七〇cm）が建っている。一方、洞雲寺入口には明治二九年の津波記念碑（高さ二〇〇cm、幅一二〇cm）が建つている。

二 街道筋に残る主な文化財

（1）道標と里程塚

○十文字の道標（水沢市佐倉河字十文字）

無年号であるが、藩政期のものと思われる。「足より 右岩や堂、左金
ケ崎」と記されている。

○伊勢堂の道標（水沢市佐倉河字「井坂」）

元禄五年建立。「右 東さき道、左 金かさき道」と記されている。

○前中野の道標（江刺市愛宕字前中野）

文化六年建立。「右ハ東山さる沢、中ハいて町けせん、左ハ人かへとを
の」と記されている。

○旧大橋の道標（江刺市向山、多聞寺境内）

文化六年建立。「右ハ東山さる沢、中ハいて町けせん、左ハ人かへとを
の」と記されている。

○中島の道標（江刺市下里字中島）

安永元年建立。「右ひとかへ道、左のてさき道」と記されている。

○馬場の道標（江刺市米里字馬場）

宝曆一〇年建立。「向 右いはやとう道、左いて東山道」と記されている。

(2) 神社

○古館の道標（江刺市米里字古館）

無年号であるが、落成期のものと思われる。「向 右ハ山みちいてこへ道、左ハ東山けせん道」と記されている。

○子飼沢の道標（住田町世田米字子飼沢）

無年号であるが、明治期のものと思われる。「右ハ小友道、左ハ人吉道」と記されている。

○前田の道標（大船渡市猪川字前田）

安政二年建立。「塚の追分け」といわれている。「右 はまなんふみち、古浜唐丹、左 おかなんふみち、有住世田米」と記されている。

○玉崎の里塚（江刺市玉里字玉崎）

「高杉塚（七里塚）」といわれている。旧道の左側に、基現存している。

○六百刈田の里塚（江刺市玉里字六百刈田）

七里塚といわれている。旧道の北側に、基現存している。

○種山の里塚（江刺市米里字種山）

七里塚といわれている。草原の中に、基現存している。

○板橋の一里塚（住田町世田米字板橋）

国有林の中に、基現存していることである（未確認）。

○柏里の一里塚（住田町世田米字柏里）

杉林の中に、基現存している。

○小府金の一里塚（住田町世田米字小府金）

旧道の左側に、基現存している。

○中沢の一里塚（住田町世田米字内）

旧道の右側に、基、わずかにそれらしい跡が知られる。

○春日神社（江刺市愛宕字東下川原）

本殿は化政期の建築と思われる。

○愛宕神社（江刺市愛宕字西下川原）

本殿は正徳四年の建立。

○秋葉神社（江刺市南大通）

「安永風土記」に、いう「秋葉山櫻現」で、岩谷堂火防祭の主神となつている。

○五嶺駒形神社（江刺市玉里字玉崎）

山次丸村の鎮守。拝殿、本殿、馬頭観音堂、神楽殿、境内社、木馬殿、宝物庫などがある。

(3) 寺院

○松岩寺（江刺市川原町）

淨上宗。瑠璃山。元禄一年良賀上人開基と伝えている（「安水の寺書出」）。

○光明寺（江刺市向山）

曹洞宗。大藏山。応永半中月泉開基、天正年中皇山和尚中興開基と伝えている（「安水の寺書出」）。旧岩谷堂館主岩城氏の菩提寺。

○瑞德寺（江刺市玉里字上植茂井）

曹洞宗。懸角山。文安二年笑岩懸悟和尚開基と伝えている（「安水の寺書出」）。旧入首館主沼辺氏の菩提寺。

○自徳寺（江刺市米里字荒田表）

曹洞宗。龍首山。慶長一年仲庵廉存和尚開基と伝えている（「安水の寺書出」）。旧入首館主沼辺氏の菩提寺。

○満藏寺（住田町世田米字本町）

曹洞宗。瑞川山。天正二〇年の開基と伝えられている。旧世田米城上阿倍沼氏の菩提寺。山門はすぐれた建造物である。

○光勝寺（住田町世田米字鈴ヶ森）

真言宗。貴宝山。承安年中藤原秀衡の創建、慶長年間再建と伝えられている。(ここには県指定の阿弥陀三尊像がある。)

○長安寺（大船渡市日頃市字長安寺）

浄土真宗大谷派。片岡山。もと天台宗であったものを明徳二年に改宗(寺伝)。東北有数の大寺院で、淨心寺・西法寺の両院を下寺として支配している。

○長谷寺（大船渡市猪川字長谷堂）

真言宗。龍福山。天慶九年醍醐寺第三世淳祐開山と伝えている(寺伝)。現在無住で部落管理となっている。(ここには県指定の阿弥陀如来坐像などがある。)

(4) 古 碑

○十文字の古碑群（水沢市佐倉河字十文字）

天明二年の南無觀世音碑をはじめ文化・嘉永・安政などの古碑五基がある。

○旧渡船場の古碑群（江刺市愛宕字桜木）

天保五年の梵字供養碑をはじめ文化・文政・嘉永・元治などの古碑九基がある。

○春日神社境内の古碑群（江刺市愛宕字東下川原）

寛政九年の湯殿山碑をはじめ文政・嘉永・安政などの古碑一五基（うち明治・昭和期のもの七基）がある。

○愛宕神社境内の古碑群（江刺市愛宕字西下川原）

享保九年の南無阿弥陀仏碑をはじめ明和・寛政などの古碑八基がある。

○戸地藏堂境内の古碑群（江刺市愛宕字梁川）

明和二年の南無阿弥陀仏碑をはじめ天明・文化・天保・嘉永などの古碑一三基（うち明治・大正期のもの二基）がある。

○秋葉神社境内の古碑群（江刺市南大通）

安水九年の山神碑をはじめ寛政・文政・天保・嘉永などの古碑九基（うち明治・大正期のもの一基）がある。

○多聞寺境内の古碑群（江刺市向山）

元禄六年の庚申碑をはじめ正徳・享保・寛延・天明・文化・嘉永・文久などの古碑一七基がある。

○中野の古碑群（江刺市岩谷堂字中野）

宝永五年の熊野二所大権現碑をはじめ享保・宝曆・天明・文化などの古碑五基がある。

○新山神社境内の古碑群（江刺市岩谷堂字余打）

寛政二年の愛宕山大権現碑をはじめ享保・文化・文政・天保・弘化・文久などの古碑一九基がある。

○玉崎駒形神社境内の古碑群（江刺市玉里字上崎）

享保二年の南無十・面貌世音碑をはじめ寛保・寛政・享和・文政・天保・弘化などの古碑一九基がある。

○大塚大明神境内の古碑群（江刺市玉里字櫛茂井野）

文化二年の大塚櫛荷大明神碑をはじめ文政・嘉永・文久・慶應などの古碑九基がある。

○六百刈田の古碑群（江刺市玉里字六百刈田）

文化二年の南無阿弥陀仏碑をはじめ文政・天保・嘉永・安政などの古碑九基がある。

○瑞德寺境内の古碑群（江刺市玉里字上櫛茂井野）

宝永二年の有縁無縫・界方露碑をはじめ享保・寛保・寛延・宝曆・文政・天保・弘化などの古碑・一基がある。

○長倉沢の古碑群（江刺市玉里字長倉沢）
文化五年の羽山大権現碑をはじめ文政・文久などの古碑八基がある。

○本町の古碑群（江刺市玉里字本町）
寛政二年の己巳供養碑など六基がある。

○法鏡印坂の古碑群（江刺市玉崎字長倉沢）
寛政二年の己巳供養碑など六基がある。

○地藏堂境内の古碑群（江刺市玉里字家後）
享保七年の南無阿弥陀仏碑をはじめ宝曆・寛政などの古碑五基がある。

○延享五年の南無阿弥陀仏碑をはじめ寛政・文化・天保などの古碑八基がある。

○長下の古碑群（江刺市米里字長下）
文化二年の大弁才尊天碑をはじめ文政・慶應などの古碑九基がある。

○九才坂の古碑群（江刺市米里字九才坂）
文政二年の南無阿弥陀仏碑をはじめ天保・安政などの古碑・一基がある。

○山本橋の古碑群（江刺市米里字山本）
享保三年の馬頭觀音碑をはじめ天保・文政・天保などの古碑七基がある。

○小股の古碑群（住田町世田米字小股）
宝曆九年の庚申碑をはじめ天明・享和・文化・天保・弘化・万延・文久・元治・慶應などの古碑・五基がある。

○小府金の古碑群（住田町世田米字小府金）
延享二年の南無阿弥陀仏碑をはじめ寛政・文化・文政・天保・安政・弘化などの古碑・四基がある。

○松尾の古碑群（住田町世田米字松ヶ平）
寛政九年の馬頭觀世音碑など七基がある。

○光勝寺境内の古碑群（住田町世田米字鉢ヶ森）
鎌倉時代の梵字供養碑など五基がある。

○金成の古碑群（住田町世田米字西風）
寛政六年の馬頭觀世音碑をはじめ文化・天保などの古碑八基（うち明治・大正期のもの五基）がある。

○上日向の古碑群（住田町世田米字上日向）
元文二年の庚申供養塔をはじめ享和・文化などの古碑六基がある。

○大野道開闢記碑（大船渡市猪川字久名畠）
天明五年の建立。

○長谷寺境内の古碑群（大船渡市猪川字長谷家）
建治二年の梵字供養碑をはじめ弘安・文保・寛文・元禄・正徳・享保・享和・文政・天保などの古碑二〇数基がある。

○櫻の木の古碑群（大船渡市盛字櫻現堂）
宝曆二年の庚申供養塔をはじめ寛政・安政・万延などの古碑六基がある。

○芭蕉句碑（大船渡市盛字本町）
天保・五年の熊野大権現碑の裏面に、「木の下は汁も駄もさくらかな翁」と刻まれている。



水沢市 館下の旧道



水沢市 伊勢堂の道標



江刺市 旧渡船場付近の古碑群



江刺市 上戸の地蔵堂・古碑群



江刺市 春日神社の古碑群



江刺市 秋葉神社



江刺市 川原町



江刺市 旧後藤家住宅(重要文化財)



江刺市 光明寺



江刺市 足軽屋敷



江刺市 旧大橋の道標(多聞寺跡)



江刺市 高屋敷坂入口(左)と県道(右)



江刺市 岩谷堂旧城址内の古碑
(延慶4年の銘あり)



江刺市 高杉塚(右)と旧道



江刺市 通称木の下の旧道



江刺市 鶴坂の旧道出口付近



江刺市 旧道の並木松(六百刈田)



江刺市 野手崎道(中央)分岐点の中島の道標



江刺市 馬場の道標



江刺市 六百刈田の七里塚と旧道



住田町 雲南坂付近の旧道



住田町 小森の古燈籠群



住田町 小府金の瓊松



住田町 川口発電所付近の旧道



大船渡市 白石トンネル付近の旧道



大船渡市 ホッヂシ「法師石」家号の佐藤家



住田町 満蔵寺の山門



大船渡市 長安寺(山門)



大船渡市 閑谷洞窟住居跡(県指定)



大船渡市 長安寺(正面)



大船渡市 長安寺(下寺西法寺)



大船渡市 長安寺(下寺淨心寺)



大船渡市 大野街道開通顕彰碑



大船渡市 長谷寺(般音堂及び収蔵庫)



大船渡市 前田の道標



大船渡市 長谷寺 木造如来坐像(県指定)



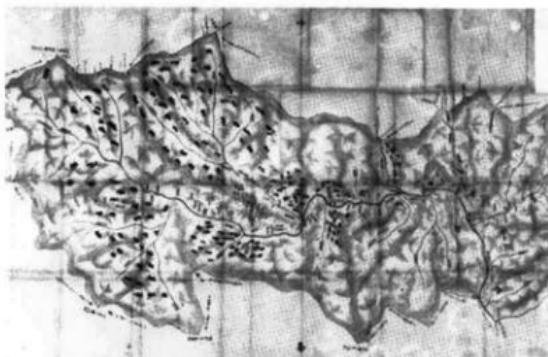
大船渡市 長谷寺 木造十一面觀音菩薩立像
(県指定)



大船渡市 長谷寺 中世の梵字供養碑群



大船渡市 橋の木下の古碑六塔



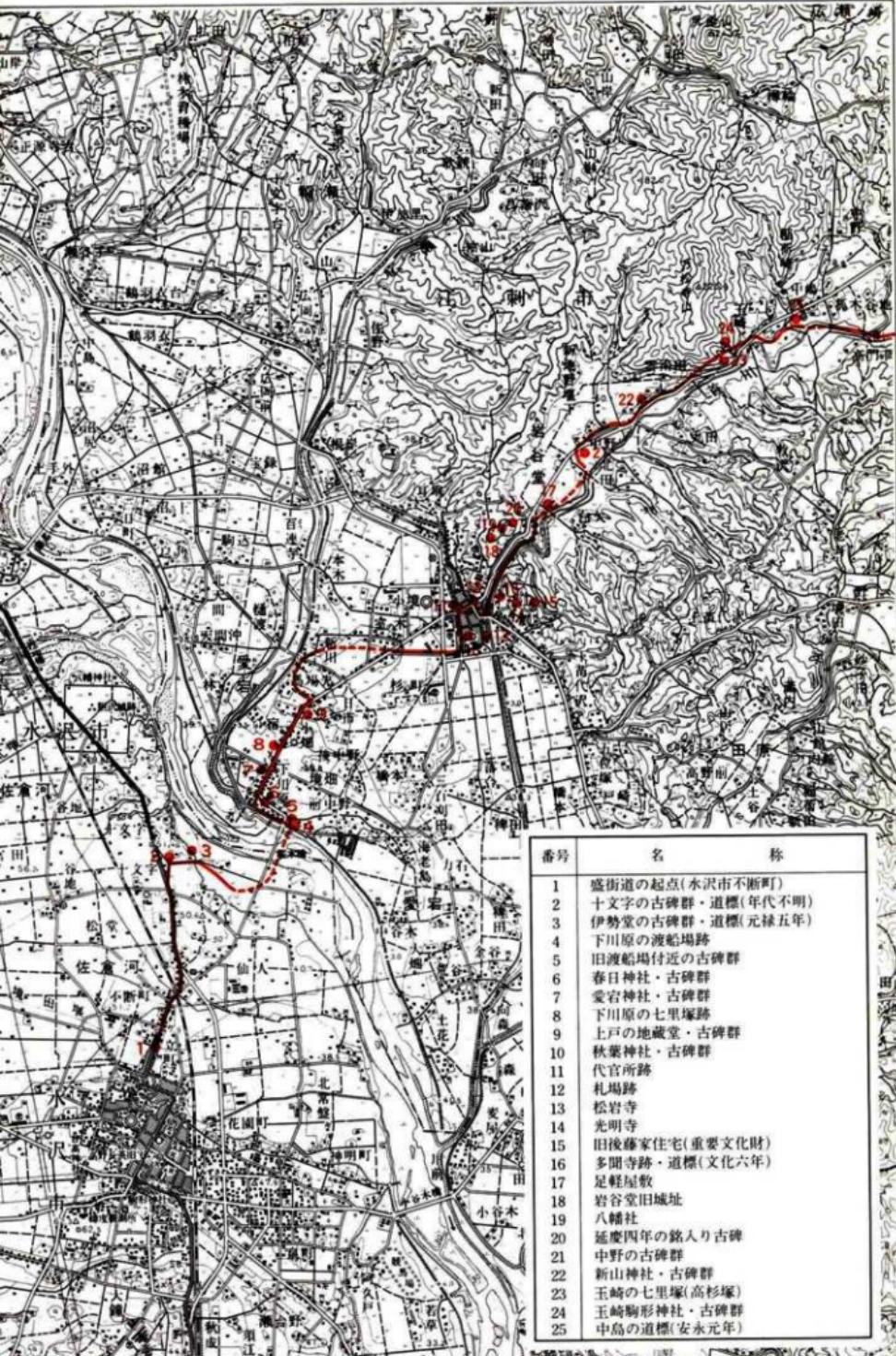
住田町 世田米村元禄絵図



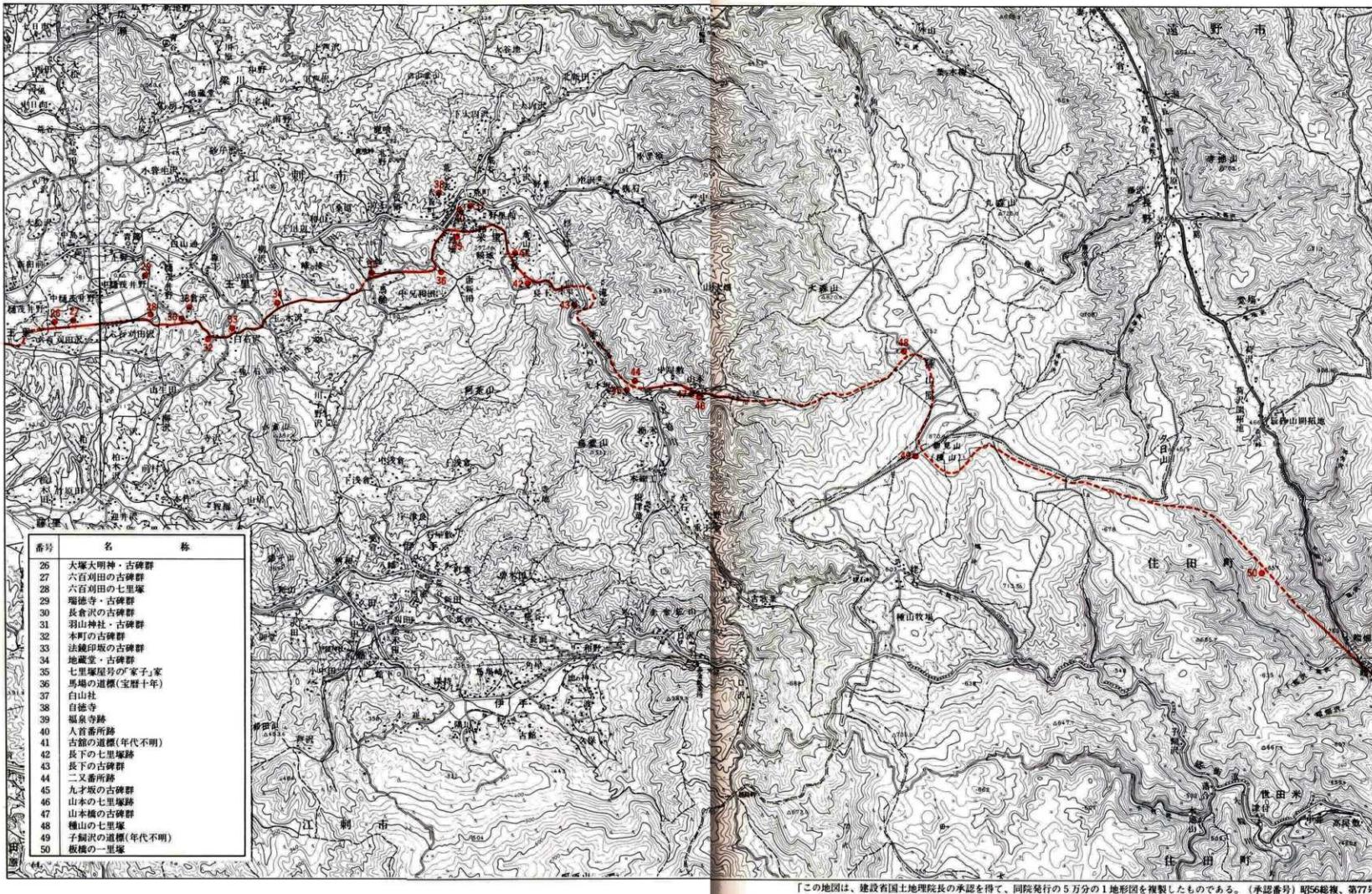
岩手県管轄地図



江刺市 次丸村元禄絵図



番号	名 称
1	盛街道の起点(水沢市不斷町)
2	十文字の古碑群・道標(年代不明)
3	伊勢堂の古碑群・道標(元禄五年)
4	下川原の渡船場跡
5	旧渡船場付近の古碑群
6	春日神社・古碑群
7	愛宕神社・古碑群
8	下川原の七里塚跡
9	上戸の地蔵堂・古碑群
10	秋葉神社・古碑群
11	代官所跡
12	札場跡
13	松岩寺
14	光明寺
15	旧後藤家住宅(重要文化財)
16	多聞寺跡・道標(文化六年)
17	足軽屋敷
18	岩谷堂旧城址
19	八幡社
20	延慶四年の銘入り古碑
21	中野の古碑群
22	新山神社・古碑群
23	玉崎の七里塚(高杉塚)
24	玉崎駒形神社・古碑群
25	中島の道標(安永元年)



「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭56復、第77号



岩手県文化財調査報告書

第六十三集

盛 街 道

昭和五十六年二月三十日 発行

編集 岩手県教育委員会事務局文化課

発行 岩手県教育委員会

印刷 山口北州印刷株式会社